ふくりゅう

発行所　日本下水文化研究会運営委員会
発行責任者　谷口尚弘(運営委員会副代表)
発行年月日　平成10年1月20日
印刷所　(株)愛甲社
編集　小松建司　新澤紀昭
冬号(通巻10号)

新年の　ご挨拶

会員の皆様に

運営委員代表　稲場紀久雄

あけましておめでとうございます。

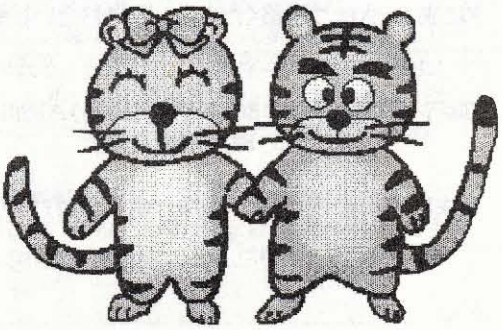
今年は寅年です。「虎は千里往って千里還る」と言います。大変勢いが盛んです。ところが、漢和字典を開いてみますと、寅という言葉には「つつしむ」という意味もあります。例えば、「寅念」(いんねん)という言葉は「慎み思う」という意味です。虎は、勢いだけが盛んなわけではないのです。行動を起こす前は、慎重を期するものなのです。音もなく獲物に接近する様子を想像して下さい。「盛んな勢い」の前に「慎み思う」行動があるところが重要です。虎の行動は、蛮勇ではないわけです。

今年は大転換時代の幕開けの年だと思います。少なくとも今年から3年間、西暦2000年までは、新しい世紀に向けた改革の期間になるでしょう。硬直化した制度が次々と代わっていきます。技術文明への過度の依存体質も修正されざるを得ません。そこで浮上して来るのが文化だと思います。しかも、市民一人ひとりにしっかりと根を張った文化ではないでしょうか。

本会は、昨年3月に開いた総会で「日本下水文化研究会を市民と自治体をつなぐ掛け橋に」というスローガンを掲げました。運営委員会は、その具体化の一環として昨年の第4回下水文化研究発表会で、その方向を目指した新しい問題提起とシンポジウム「水文化のネットワークを目指して」を開催しました。今年は、さらに新基軸を打ち出せるように努力を傾け、忍耐強く一歩一歩その具体化を図って参ります。新しい時代という革袋には新しい酒をです。

今年も会員の皆様と手を取り合って、慎重かつ大胆に夢のある実り多い活動を繰り広げていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

1998年1月元旦



第4回下水文化研究発表会終わる

第４回下水文化研究発表会は神田・学士会館で平成９年11月21日１０時より行われた。来賓挨拶の後、辰濃和男氏の基調講演「一滴の水」・酒井彰氏の問題提起に続き、午後から３部門に分かれ21論文の研究発表がなされ、さらにパネルディスカッション『水文化のネットワークを目指して～市民の役割・行政の役割～』をパネリスト稲場紀久雄氏、佐多和子氏、徳永**暢男氏、広松伝氏、安田実氏、司会谷口尚弘氏で行われた。**

最後に本日の優秀論文３点

「大坂の水道～背割下水～」
山野寿男氏、

「アフリカの村落給水の現状」
丸尾祐治氏、

「インドネシアの水文化と生活」アルディ・チャンドラ氏の三方が受賞。

また、当会に多大なる貢献をなされたとして特別表彰を松田旭正氏が受けられました。

記　小松

下水文化研究発表会に参加して

私は東京都とジャカルタ市姉妹都市交流・技術研修で、清掃事業について東京都清掃局で1997年4月から1年間研修しています。清掃局の石井さんから「下水文化研究発表会」で「インドネシアの水文化」についての発表してくださいと言われたのですが「水文化」とは何か分かりませんでした。

石井さんと話をして論文の骨組みを決めたのは締切りの2週間前でした。(注、水文化の説明は「水を尊び、大切にする生活」と言うように説明しました。また、論文ではインドネシアの水文化を浮き彫りにしたかったのですが手本にする適当な論文が見つからず、迷路に入り込んだようで筋の通った内容で説明が出来ませんでした。発表が終わり論文集で他の論文を改めて読むと多くのヒントが有りました。)

清掃局・生活文化局も発表には理解を示してくれました。発表当日は清掃局から高崎さんや新田日さんも駆けつけてくれました。

この発表で優秀論文の表彰もいただきました。良い思い出になるのは勿論ですが、仕事に対する今までと違った考え方を得ることが出来ました。例えば清掃事業はゴミを集めるのですが「文化」という視点で考えると一層仕事が深く新鮮なものに見えます。

これは私が日本で得た素晴らしい財産です。下水文化研究会の皆様、本当に有り難うございました。ジャカルタに来るときはご連絡ください。是非お会いしましょう。

℡ ジャカルタ(021)8092744(清掃局)ARDI　CHANDRA
8410779(自宅)

注は東京都清掃局　石井　明男が付けました。

第４回下水文化を見る会

第4回下水文化を見る会は、平成9年11月22日東京は両国駅前に集合から始まった。しとしと降る雨に、参加者の集まり具合を気にしながら待つ幹事。少しの遅刻者がいたが、まずは順調なスタートをきることができ、幹事は、ほっと一息。会場の江戸博物館内会議室へ。

栗田彰氏の講演「川柳に見る江戸のリサイクル」の後、博物館を見学、解説後であったので見る視点が違い新たな発見をした。

次の会場にはの参加者の協力でタクシーでスムーズに移動。食事がでるまでの合間に、雨水利用を進める市民の会副会長・徳永氏の講演（？）。東京の下町が肌で感じられた。

食事後いよいよ一寺言問の防災まちづくりの見学。下町の細い道路を占領するほどの人数が、ゾロゾロと歩き出す。時折降る雨に傘が開く。が、みなさん熱心に解説に耳を傾け、路地尊、天水尊、会古路地など耳慣れない言葉の意味を知る。このあたりは、戦争で焼けなかったところで、随所に古風な町並みが現れている。

下水文化を見る会に参加して

小松　美佐子

「川柳に見る江戸のリサイクル」と「雨水の利用」というイキなテーマに魅せられて思わず参加した。

二年ほど前に江戸東京博物館を見学したことはあるが、今回の「江戸の下水道」を主題に改めて見直して、町の仕組みや、暮らしに早くから下水が、工夫されていたことを改めて知り感動した。

雨水の利用について防災町づくりの見学では、下町生まれの私にとって路地裏と家並みは懐かしい光景であり、夢中で探訪をした。

戦争にも焼け出されなかった町と説明を受けたが、当日の家々と生活ぶりを平成の現代に見て、以前写真集で見た、江戸庶民のくらしの中に迷い込んだ感があった。

それにしてもこのような下町では災害が起こったら被害は想像以上であろう。防災に力を入れる住民の方々の思いが手に取るように知れる。正直なところ見学会に参加するまで、雨水利用についてはあまり興味がなかった。しかし考えてみれば口にする水より生活用水の方が多い今日、雨をそのまま流してしまっているなんて何ともったいないことであろうか。

天水尊を作られた方々のご苦労を思って生活水は大切に使用してきたいと思った。今日も雨が降り続いている。天水オケをそっと庭においてみたくなった。日頃食べ物に関する仕事をしている中、専門以外にもふれて、多くの方々と出会い久しぶりに充実した一日であった。

マスコミ情報

第4回下水文化研究発表会
水の再生で熱い議論
水文化のネットワーク目指し
市民の役割、行政の役割話し合う

▲都政新報97/12/2

人気を呼ぶ下水道科学館

▲日本下水道新聞97/12/22

入館者、30万人突破
大阪市

▶読売新聞 97/11/21

江戸期の下水道 現役でござる
新宿・荒木町の武家屋敷跡

地下10メートル 石積み 生活排水処理300年 今後も使います
区教委調査

原始・古代からの変せん紹介
『トイレの考古学』
大田区立博物館展を再録

▲日本下水道新聞98/1/1

▼東京新聞97/10/16

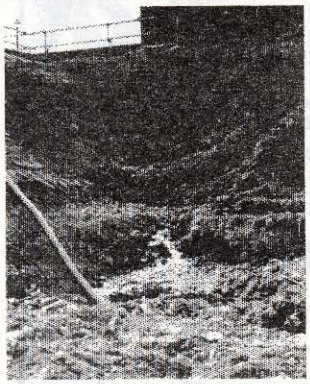
書評 ゴルディオンの結び目（著者・越智紀久雄）
公共サービスのあり方を深く考察する入門書

◀日本下水道新聞 97/11/3

新景
暗渠の上に蘇った清流 人の心も潤す
東京・世田谷

伏流を見た！

東京都下水道局の多摩川流城下水道「浅川処理場」の沈砂池拡張工事現場で伏流水を見ることができました。



地面から4～5メートルほど掘り下げた所から、勢いよく水が吹き出していましたので工事担当者に聞いてみましたら「伏流水だ」ということでし。「伏流水を見られるなんて！」と思って写真を撮りました。

工事現場ではその伏流水をポンプで汲み揚げて近くの用水堀へ流しています。浅川処理場は多摩川と浅川の合流点近くにあり、伏流水の流れの方向は浅川側から多摩川側へ流れていたようです。沈砂池の拡張工事現場で伏流水の流れが断ち切られたことになります。

沈砂池が出来上がったら伏流水の流れはどうなるのでしょう？。

(栗田・記)

情　報　コーナー

福岡市に水道ができるまで

福岡市に水道がなかったころ，人々は，いどの水を飲み水として利用していました。しかし，しおけが強かったり，にごりがあったりして，飲み水に使えないいどが多かったのです。市では，1889(明治22)年，イギリス人のバルトンにたのんで，水道をつくるための調査を行いました。しかし，工事にたくさんのお金がかかるので，実行されませんでした。

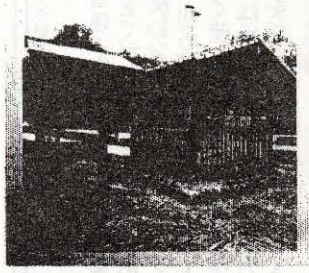
▲バルトン

ところが，そのころ，よごれた水がいどに入り，コレラなどのおそろしい病気が，しばしば流行しました。そこで市は，今の県庁近くにあった松原のいどからくんだきれいな水を飲み水と決め，水売りの人が，市の人々に売り歩くようにしました。

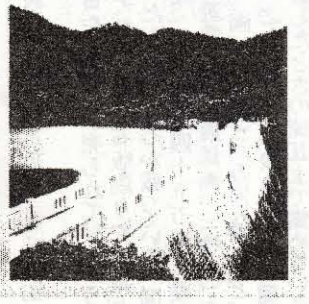
▲水売りの車

福岡市に水道ができたのは，今から70年以上前の，1923(大正12)年のことでした。

▼今もこっている松原のいど



▼70年以上も前につくられ，今も使われている油瀬ダム



社会 4年生上　光村図書

15

下水文化叢書　鳥海たえ子著
『霧の中から』　ドイツへ

ここに二枚のシーボルトの切手があります。これは1996年「シーボルト生誕200年」を記念して日本とドイツで同時に発売されたものです。

▲ドイツ発行

▲日本発行

ドイツで発行された切手を送って下さったのは、ミュンヘン在住の作家、シュミット・マスミ・村木さんです。シュミットさんは、『ベルツ・花』に関する著書や『青山光子(クーデンホーワ・ミツコ)』の評伝などで多くのファンを持つ方です。

岡　並木先生を通じて、1994年バルトン忌の『バルトンとベルツ』のレジュメを入手されたとのことでお手紙を下さいましたので、ベルツについての記述が掲載されている『霧の中から』と『下水文化研究 VOL. 7』をお送りしました。『霧の中から』に見られるベルツ・花さんの江戸っ子らしい様子や言葉遣いに「想像していた通りでとてもうれしい。貴重な資料です。」と感想を寄せて下さいました。

その後も、美しいヨーロッパの街の写真や、音楽の情報などを送って下さっています。

『下水文化叢書』が、ドイツでも活躍していると思いますとなんだかワクワクしますね。

バルトン先生
教科書に登場！

光村図書発行の小学校4年生「社会」の教科書にバルトン先生が、写真入りで掲載されていることがわかりました。

W. K. バルトンの曾孫である、鳥海幸子さんのピアノ教室の生徒さんが「この方は、鳥海先生のひいお祖父さんじゃないでしょうか。」と教科書のコピーを持ってきて下さったそうです。

鳥海さんからコピーを見せていただいた私は、ぜひ教科書を見たいと思い光村図書に電話をしました。社会科編集部の方が、すぐに『社会科4年上巻』の教科書を送って下さいました。

「わたしたちのくらしと水」という章に「明治22年イギリス人のバルトンが水道をつくるための調査をした」と書かれています。

「テストの問題になったりしているのでしょうか。」と、鳥海さんは微笑んでおられました。

たでくら虫b

=抜書=

地境の下水

岩波文庫「幕末明治　女百話」（上）より

御風呂屋さんが今二軒あります。一件は鳥問屋東国屋（今なし）の裏で、『浜田湯』といいました。現今は代変りの『甲子湯』といってますが、その浜田湯と東国屋との間に、大溝渠があって、ソレは町境のもので、私用地ではないから、その上を往来にすると、浜田湯は表通りへ、お客の入口が出来るとあって、その筋へ願い出たものですが、とうとう裁判となってしまったンです。ところが東国屋が元禄からの鳥屋で、その時代から使用しているというので、わけもなく浜田湯が負けになってしまったといいます。

◇町境に大きな下水路があったことがわかります。

江戸時代の沽券絵図などをみましても、町境には三尺から六尺、大きなものになると九尺くらいの下水路がありました。この話は、明治時代を生きた女性の話ですから明治時代にも江戸の頃の大下水が町中に残されていたようです。そこを埋立てて道路にすれば、浜田湯は表通りに入口をつくれることになり商売上有利になったわけですが、裁判に負けてそれが出来なくなったという話です。

この話だけでは良くわかりませんが、東国屋が元禄時代から使っている下水路を埋立てることが出来なかったということでしょう。よけいなことですが、甲子は「きのえね」が標準語的な読み方ですが、ここでは、わざわざ「きのいね」と振りがなを付けていますから、話し手が江戸弁で喋っていたのでしょう。話言葉の中にも明治に残っていた江戸が感じられます。

（栗田）

週間新潮11月20号「古書案内」で次のような記事を見つけた。

明治二十三年十一月十三日、東京・浅草に十二階建ての「凌雲閣」が開場した。「浅草十二階」の名で親しまれたこの新名所は、十階までが八角で煉瓦造り、その上の二階は木造だった。設計は東京の水道計画にも携わったお雇い外人、ウイリアム・バルトン。二階から八階までは名店街式の売場で、初めはエレベーターで客が上下していたが、故障が多くて危険というので、間もなく使用禁止になり、螺旋階段を使うようになる。入場料は大人八銭、小児と軍人は半額。十階以上は展望台になっていて、開場の翌年の正月三日間には、初日の出を拝もうと入場者が二万人を超えたという。

だが、この浅草十二階は大正十二年の関東大震災で途中から折れ、残りは工兵隊によって爆破されて姿を消した。

東京タワーや池袋サンシャイン60で、その絵葉書や土産品が売られているように、当時、この浅草十二階の錦絵がずいぶんと出た。それはやがて石版刷りや写真となっていくが、東京・時代や書店の目録にはこうしたものがいくつか載っている。開場間もなくの錦絵「凌雲閣カラクリ絵双六」（国政画、二枚続）は四十五万円、「凌雲閣組上絵」（国利画、二枚続）六万円、「浅草公園遊覧之図」（周延画、三枚続）七万五千円、「浅、草公園十二階凌雲閣之図」（延一画、三枚続）三万円などなど。

在野で江戸・東京の研究をしていた故喜多川周之さんは、この浅草十二階関係資料のコレクターで、錦絵はもちろん、看板や爆破したときの煉瓦まで集めていた。

（米）

お知らせ

会費未納の方にただいま督促をしていますが、行き違いになった方がおりましたら申し訳ございませんがそれは破棄してください。お納めいただく方はできるだけ早めにお願いいたします。

問い合わせ先　浅川処理場　栗田まで
Tel　0425-81-9787

「ふくりゅう」では原稿を募集しています。身近な話題などでも結構ですので送ってください。又、「ふくりゅう」に対する意見等もどしどし送ってください。

〒135　東京都江東区東陽7－1－14
東京都下水道局東部第一管理事務所業務課　小松　建司

本下水文化研究会連絡場所の変更

（社）全国上下水道コンサルタント協会の移転に伴い、当会の連絡先も下記のように変更になりました。当分の間、郵便物は回送されます。

〒106-0047　東京都港区東麻布1－8－7
平和堂ビル別館3階
TEL　03-3584-0919（変更なし）

編集後記

正月明けに間に合わそうとしたが原稿が集まらなかったので、などと毎度の言い訳になってしまうが何とか1月中に出すことができた　（建）